
星空

浮遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星空

【コード】

N4201BA

【作者名】

浮遊

【あらすじ】

どこまでもいつまでも立ち直れない青年が、いつかの約束の地へ訪れ……

「おー。おにいちゃん？何で泣いているのですか？どこか痛いのか？」
ふとそんな声が聞こえた。

視線をずっと下にさげていくと

長い髪の少女が不思議そうに首を傾けていた。

「俺のことか？」

「おー。そうなのです。」

「大丈夫だよ。君はどうしたのかな？こんなところに一人なんて、
迷子かい？」

そう言ってゆつくりと微笑む。

ここは少し町外れの、見晴らしのいい丘だ。

いつか宛もなくなださまよって、この静けさに魅了されて以来、
ずっとなんとなく来ている。

こんな子いたっけ？

どこか神秘的な雰囲気醸し出して、

上手く年齢がつかめないが、少なくとも中学生以下だろうか。

「うー。違うよー。私は、おにいちゃんに会いに来たのです」

「ん？俺かい？」

意外だった。この子に見覚えがない。さっぱり見当がつかない。

「うん。おにいちゃんが毎日ここに来て悲しそうにしてるから」

「ん。……そっか。」

ああ……。そういうことか。そんなに顔に出てるのかな。子供に心配されるなんて……。情けないな……。

自嘲がこぼれる。

「どうしてかなしいの？どこか痛いのか？不安げな表情で俺を見つめている。」

「……俺はさ。」
ポツリと言葉を紡ぐ。

「大事なひとを傷つけちゃったんだ。もう結構前の話だけどね」

「それはおにいちゃんの大事なひと？」

「うん、そう。とても大切な人だったよ」

そして……。

「その人はもういないんだ。お空に還っちゃった。」

そう掠れた声で言うのが精一杯だった。

俺のせいで。俺が中途半端で。

さんざん傷つけて。

傷つけることしかできなくて。

なのに……。

ずっと笑顔だった。

何にもできなかつたのに……。

ありがとうって言うて。

そんなに泣かないでって励まされて。

微かな掠れた吐息で。最期の最期まで心配かけて。

結局俺は何も言葉を返せなかつた。

何度も後悔と寂寥感が蝕む。

そして自己嫌悪する。

「おにいちゃん……」

不意に呼ばれ、ハツとすると、そこには不安げに揺れる瞳が二つあった。

悲しそうに微笑んだのだろうか。

「そんなことないと思うの」

そんなことを女の子は言った。

「ごめん。さっきの声に出てたかい？」

そう聞くと、こくんと首をたてに振った。

そして不意に、

「おにいちゃん。行きたい場所があるの。ついてきて」

そんなことを言うていきなり走り出した。

「お、おい。待ってよーっ」

そう叫ぶとやっとこちらを見て止まる。

「おにいちゃん。はやくーっ!!」

そう急かされる。

そうしてしばらく歩いて着いたのはとても小さな森だった。

「ここかい？」

そう訪ねると女の子は

返事の代わりに森の中へ再び歩き出した。

「どっしてここに？」

そう尋ねると、

「ここは星がきれいだから。お空がとても近くて、とてもとても好きだから。そして大切な思いでの場所だから」

そう言ってふと立ち止まった。

「1111」

そこはなんでもない、特に代わり映えのしない、木の下だった。けどここは……。この場所は……。

間違いようもない……ここは

ふと隣を見ると、少女が横たわって空を仰いでいた。

つられて俺も空を仰ぐ。

そこには、満天の星空が煌々と在った。

……………。

……………。

……………。

……今も昔も変わらず綺麗だな。

そんな気持ちで少女も感じたのか、

「綺麗でしょ？」

そう言った。

「ああ。とても綺麗でとても懐かしいよ」

そう言って、

心地よさに身を委ねて目を閉じ感じてみる。

ここはね、大切な人といつか

また一緒に見るために希望を埋める場所なの

……希望を埋める？

うん。星はきつと輝いているから。雨の日でも。

そしてこの空はどこまでも繋がってるからって……。

そんな願いを込めている場所なの。だから……。

だからこの場所で時に抗えるように、どこまでも貴方と一緒にって願うの。ね？

うん……。

本当に懐かしいソプラノの、きれいな声で、

そんな言葉が俺の中に響いた。

やがて　どれくらい目を閉じて考えてたのだろうか
ゆっくり目を開ける。

体を起こし回りを見渡してみる。

隣からはあどけない少女の寝顔と静かな寝息がする。

疲れちゃったのかな？

少し微笑ましく思う。

そして、

今のうちかな……。

そんなことも思う。

ふるふると頭を振って、木の下へと向かい屈む。

「ごめん。少し早いけどいいよな？」

同意を求めて、どことなく咳く。

そこには白い箱が、

いつか二人で退院したら開けようと約束して、ずっと前に埋めたものだ

ひとりでにポツンと置いてあった。

しばしの躊躇いの後、意を決して開ける。

そこには箱の内側に星が散りばめられているのと、
幼い文字で書かれた手紙が一通。

d e a r …

この箱とこの場所が、貴方と居た証拠です。

貴方と見た星が、この箱が、証明してくれます。
貴方と一緒に居れた、それだけで私は幸せです。

f r o m …

そう書いてあった。

……。

そんな言葉に、ふと懐かしさが込み上げる。

どれだけだったのだろう。あれから。

俺はとて不甲斐なくてさ……。

まともなこと、何にもしてやれなかったよ。

だけど……。俺も幸せだったよ。

いつまでも…心配ばっかかけてらんないかな？

ごめんな。だからってすぐに立ち直れるわけじゃないよ……。

それでも。

少しずつ少しずつ進んでみせるから。

だからもう少し待ってて。

触れることはできないけど星と空があるのなら、感じることはできるよね。

ばいばい、

またな。

いつかあの空まで逢いに行くから。

その時までな。

うん。

約束だよ

そんな、少女の返事がどこから
聞こえた気がした。

はっと少女がいる方角を振り向けば、そこには、澄んだ空と数多の
星だけが煌々と、佇む自分と共に在った。

幼き少女の声はどこまでも胸に深く深く響き渡っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4201ba/>

星空

2012年1月11日01時55分発行